

研究ノート

# 桜美林大学における尊厳教育の実践 －清水安三の教育実践との接点を踏まえて－

メンセンディーク ジェフリー<sup>1</sup>

The Practice of Dignity Education at J.F. Oberlin University:  
Exploring Connections to the Educational Praxis of Yasuzo Shimizu

MENSENDIEK Jeffrey<sup>1</sup>

## 要旨

本研究ノートは、ハーバード大学のドナ・ヒックス氏が提唱する尊厳教育の方法論を用いて大学生を対象に行ったワークショップの実例を紹介し、学習後の「感想」から尊厳教育の効果を述べることを目的としている。桜美林大学で1年半に亘って計10回、延べ551名の学生がワークショップに参加し、「尊厳」を自分事として捉える経験をした。難しく捉えていた概念を分かりやすく学ぶことで、学生たちは自分の命や人との関係に新しい視座を与えられエンパワーされた。ヒックスも「尊厳を学ぶことは、人間として開花する能力を促進させる<sup>(1)</sup>」と書いている。この尊厳教育の取り組みは、桜美林学園創立者・清水安三の目指した人間教育と結びつき、具現化する内容を持つものだと筆者は考える。本稿は、その可能性を探る第一歩として、尊厳教育の実践報告と学生たちの反応を記録するものである。  
キーワード：尊厳、尊厳教育、命の価値と弱さ、普遍性、清水安三、自校教育

## 1 はじめに

国連の世界人権宣言を始め、数多くの憲法や国際条例はその基本概念として「人間の尊厳」を用いている。また、近年話題のSDGsにおいても人間の尊厳を守るための行動が重要視されている。尊厳の保護は今や公共の秩序の一部であると国際社会は認めている<sup>(2)</sup>。しかし、誰もが尊厳の重要性を認識している一方で、一般の人に「尊厳とは何か？」と聞いてみると、多くの人は答えに困るのが現状だ。「尊厳」が人間そのものに内在する大事なものであるという漠然とした理解を有していたとしても、それを言語化して説明できる

<sup>1</sup> 桜美林大学ビジネスマネジメント学群准教授

人は少ない。なぜなら、多くの人は「尊厳」を身近なものとして捉えたことがないからである。

尊厳の概念をめぐる議論の歴史は複雑である。現代の政治、経済、法律、倫理において欠かせない普遍的な原理だとされる一方で、尊厳は「近代以来、本来の文脈をはぎ取られて、剥き出しになった、すなわち裸にされた (de-contextualizeされた) 概念<sup>(3)</sup>」だと言われている。政治哲学者のマイケル・ローゼンは次のように指摘する。「尊厳は役に立たない概念だ。この言葉には、人々ないし彼らの自律に敬意を表するという以上の意味はない<sup>(4)</sup>。」ローゼンは、他にも尊厳の概念に対する指摘として、尊厳は余分なもの、より根元的な概念に属する概念でしかないと見る傾向があると指摘する。現代において「尊厳」という言葉は意味をなさないほどに使い古された概念として今や意見の不一致を産み出す言葉とさえ見られている。

このような状況にあって、長年世界各地で紛争解決にあたってきたドナ・ヒックス氏 (ハーバード大学研究員、心理学者) の「尊厳」に関する実践的研究は私たちに新たな視点と大きな可能性を与える。本稿では、ヒックスの研究実績を概観し、アメリカですでにヒックスが導入してきた尊厳教育の実践を基に筆者が桜美林大学で取り組んできた尊厳教育の実例を紹介する。次に、学習に参加した学生たちの感想を紹介し、尊厳を学ぶことの意味を考察する。最後に、これらが将来的に桜美林大学の自校教育 (創立者清水安三の教育実践) と結びつく可能性を探りたい。

## 2 ドナ・ヒックスの紹介とその功績

20年以上にわたって世界各地の紛争地域で敵対関係にある人たちを同じテーブルに着かせて対話と和解の糸口を求めてきたヒックスは、その経験の中で大きな疑問を持つようになった。なぜ人は暴力をやめて和解の道を開くことができないのか？ 新たな生活を始めることを求めているのは明らかなのに、彼らをそうさせない原因はどこにあるのか？ 今までの取り組みで私たち仲介者が見落としてきた大事なものは何か？ こう考えるうちにヒックスは人間の本質的な理解に関わる「尊厳」の問題へと導かれた。すべての敵対関係の根底に尊厳の問題があると考えたヒックスは、尊厳を可視化するための方法を模索し始めた。世界各地でインタビューを重ね、紛争地域や対立関係にある人たちの痛みを耳を傾ける中から生み出された枠組みが「ダイグニティ・モデル (尊厳モデル)」である。その著書、*"Dignity: Its Essential Role in Solving Conflict"*<sup>(5)</sup> でヒックスは初めて人間関係の中で具体的に見えてくる尊厳の姿を提唱したのだった。

上記で述べた尊厳概念をめぐる歴史的議論を踏まえると、ヒックスの視点には3つの特徴があると言える。第一に、ヒックスは実践者である。人が関わり合う実践現場において生じる問題として「尊厳」の重要性を捉えている。第二に、彼女は紛争や対立関係の問題を理解するために「尊厳」のレンズを用いた。そして第三に、彼女にとって「尊厳」とは

関係性の中に存在するものであり、お互いをどのように扱うかによって見えてくるものと考えている。“*Reflections on Love and Dignity in Resolving Conflict*”という論文の中でヒックスは次のように言っている。「哲学者たちは尊厳とその意味について確かに豊富な知識を持っている。しかし、彼らは尊厳を用いて対立関係の修復に当たるということよりも、それを分析して定義づける方に関心があるようだ<sup>(6)</sup>。」ヒックスのような実践的視点こそが今までの尊厳概念をめぐる議論に欠けていた新しい視点ではないかと考える。

ヒックスに対する評価は実践的課題に取り組む分野の学術誌に多く見られる。中でもヒックスの「ディグニティ・モデル」に注目しているのは経済活動団体の職場環境を改善するために研究者、実践者、政策立案者の論文を集めているHumanistic Management Journalである<sup>(7)</sup>。現にヒックスの二冊目の著書、“*Leading with Dignity: How to Create a Culture that Brings the Best out of People*”<sup>(8)</sup>は、彼女がコンサルタントとして関わったアメリカの企業、学校、病院、NGOなどの実例を取り上げ、集団生活の中で生じる対立関係の中でいかにして尊厳を守ることができるのかのハウツー本となっている。その他に、ヒックスの「ディグニティ・モデル」に注目する学術誌は次のような多彩な実践的課題に取り組むものである：宗教間対話 (Journal of Interreligious Studies)、平和学や紛争解決学 (Peace Chronicle、International Journal of Conflict Management、Negotiation Journal)、メンタル・ヘルス、(Global Mental Health EthicsやInternational Journal of Law and Psychiatry)、いじめの問題 (International Journal of Bullying)、教育 (The International Journal of Diversity in Education、) 人権 (Netherlands Quarterly of Human Rights) などである。これらの学術誌に目を通すと、ヒックスの研究成果が幅広い反響を呼んでいることが分かる。

### 3 ディグニティ・モデルの学習

すでに述べたように「ディグニティ・モデル」は対立関係にある人たちの問題解決を促進させるために作られた新たな枠組みである。ヒックスは次のように主張する。「ほとんどの人は自分の生まれ持った価値に気づいておらず、たいていは他の人の固有の価値を認識するすべを知りません。このような無知は痛みや不安だけではなく様々な形で人間関係が失敗する原因となります。とはいえ、誰にでも尊厳というものについて何らかの本能的感覚はあるようです。それを言葉で説明することはできなくても、人間の深いところに埋め込まれているのが尊厳です。わかっているのは、わたしたちはみんな自分が価値ある者として扱われたいと思っていること、そしてそのように扱われないときには苦しい思いをすることです。尊厳についての理解（私が尊厳意識と呼ぶもの）は、その苦しみを取り除くために大きな力を発揮します<sup>(9)</sup>。」ヒックスの研究は今も発展途上にあるが、彼女が「ディグニティ・モデルの構成要素」と呼ぶものからいくつかの中心的な考え方を紹介する。

### 3.1 尊厳の定義

ヒックスは尊厳を次のように定義づける。「尊厳とは、生きるものすべての価値と弱さを認めて受け入れることから来る内面の平安である<sup>(10)</sup>。」一見、曖昧さを含んだ定義に見えるが、ヒックスとすればその曖昧さも重要なポイントである。数多く存在する尊厳の定義の一つとしてその特徴を三つ取り上げたい。まず第一に、尊厳とは内面の平安であるとされているが、その平安は周りの人などが自分をどのように扱うかによって生まれるものであると定義している。自分以外のものとの関係に由来する内面の平安ということになる。すなわち、尊厳は関係性の中にあるものだとヒックスは考える。第二に、彼女は尊厳を人間に限定せずに命あるもの全てに広げている。第三に、命の「価値と弱さ」に注目している。その「価値と弱さ」が認められて受け入れられるのかが重要である。誰もが価値ある者として扱われたい願いを持っているがゆえに、粗末に扱われると簡単に傷ついてしまう弱さを抱えている。尊厳を理解するためにまず注目すべきは人間をはじめとするすべての生命が持つ「価値と弱さ」であるとヒックスは考える。

尊厳理解をよりはっきりさせるためにヒックスが注目したのは「尊敬」の概念である。「尊厳」と「尊敬」は類語として捉えられがちだが、この二つの言葉には根本的な違いがあるとヒックスは言う。「尊敬」とは人の能力や実績、性格や生き方に対して周りの人が評価を与えることであるが、尊厳とは、生まれてくるだけで人間が有する価値のことである。赤ん坊を例に考えてみる。赤ん坊はこの世に生まれてくるだけで固有の価値を持つ。その赤ん坊に私たちが愛情を注ぎたくなるのもそこに価値を見出すからである。同時に幼子は弱い存在であり周りの人の支えを必要とする。この赤ん坊の姿こそ、私たちが大人になっても有している価値と弱さを物語っているのではないかとヒックスは指摘する<sup>(11)</sup>。

### 3.2 「尊厳の10の要素」と「尊厳を侵害する10の誘惑」

次項の表1は、ヒックスが世界各地で200以上のインタビューを重ねた中から誕生した二つのリストである。これは、文化も立場も状況も異なる人たちの語るストーリーから浮かび上がったパターンをヒックスが体系化し、日常のこととして尊厳を捉えるための枠組みである。尊厳教育の学びはこの二つのリストを学習することが中心となる。

ここで、筆者が行った尊厳学習の具体的内容を紹介しながら二つのリストを考えてみたい。学生たちの学びはワークショップ形式（参加型学習）で行われる。2週間に亘って2つの100分授業を利用し、初日は「尊厳の10の要素」を中心に、2日目は「尊厳を侵害する10の誘惑」を中心に学習する。参加者はそれぞれ4～5人のグループに分かれて講義で紹介される内容をその都度グループ内で確認しながら理解を深める。初日は「尊厳の10の要素」の学習の導入として、趣旨説明、ヒックスの紹介と尊厳の定義、尊厳と尊敬の違い、そしてソーシャルペインと尊厳の関係<sup>(12)</sup>を取り上げる。「尊厳の10の要素」の学習の後には、ロールプレイを通してさらに日常のこととして尊厳理解を深め、最後はグループ内で、尊厳が尊重されたとき、または侵害されたときのことを話し合ってもらおう。グループ内で学

表1 ヒックスの「ディグニティ・モデル」(より詳しい内容は資料1参照)

尊厳の10の要素	尊厳を侵害する10の誘惑
アイデンティティの受容	挑発に乗る
評価する	面子を保つ
認識する	責任から逃げる
仲間外れにしない	偽りの尊厳を求める
安全	偽りの安全を求める
公平性	対立を避ける
自主性	自分が罪のない被害者だと思い込む
理解する	フィードバックを拒否する
良い方に解釈する	罪悪感を避けるために他者を非難し侮辱する
言動に責任を持つ	偽りの親密さを求め、うわさ話をする

生たちは「尊厳の10の要素」のリストを参考に自分の生活を振り返り自分事として尊厳を考える。このリストをレンズのようにして普段の生活を見ると様々な「気づき」が与えられる。大切に扱われて嬉しかった経験や粗末に扱われて傷ついた経験である。尊厳のことを一人で学ぶのではなく、他者と一緒に考えることも学習的効果を高める。ワークショップ参加者が20人に満たない場合は話し合った内容をもとに寸劇を演じてもらうこともある。そうすると、尊厳をありふれた日常に存在するものとしてみんなで確認することができる。参加者は、自らの尊厳ストーリー<sup>(13)</sup>を振り返る経験を得るばかりではなく、他者の尊厳ストーリーに触れる機会を与えられ、尊厳の普遍的価値を実感する経験を得る。

二日目の学習は人間理解から始まる。初日の学びが「命の価値」というテーマの学習だとすれば、二日目の学びは「命の弱さ」が中心テーマとなる。近年の進化生物学や心理学の研究では人間の本能や習性の複雑さが様々な形で明らかにされている。人間の本能や心理は時として私たちの行動に矛盾を生じさせると学者たちは指摘する<sup>(14)</sup>。このことを踏まえた上で「尊厳を侵害する10の誘惑」を学習すると、相手を傷つけてしまう衝動や、人間関係に不和を生じさせてしまう危うさ、または自分自身を大切にできていないことなど、頭では理解しているつもりでも陥ってしまう落とし穴の実態を学ぶことができる。私は「尊厳を侵害する10の誘惑」を説明する時にはできるだけ身近な実体験を交え、また、自分の失敗談も紹介するようにしている。人間の持つ弱さとは決して悪いものではなく、人間であることの一部である。人間の習性や陥りやすい誘惑を学ぶことで、私たちは本能的な習性に振り回されないための行動を心がけることができる。尊厳教育の目標は、意識をもって尊厳を守る行動や策を心がけることにある。

「尊厳を侵害する10の誘惑」を学んだ参加者はこのリストを参考にしながらグループワークに入る。トピックは「あるある話を話し合う」ことである。誘惑に負けてしまった経験は誰もが持っている。参加者は、始めは自分の経験を他者に話すことにためらいを覚える

が、勇気をもって話して見ると実は他者も同じような経験を抱えていることを発見する。そして、相手の話に共感する自分があることに気づく。少し恥ずかしい話、普段は隠している自分の弱さの話が周りの共感を呼ぶのである。このグループワークをすると参加者の中から笑いが起こることが多い。笑い声は、参加者が自らの体験を聞いてもらって共感してもらうことからくる安心感と、他者の弱さ体験に触れて共感することから生じる参加者同士のつながりから来るのではないかと筆者は考える。グループワークを通して参加者は共通のものとして人間の弱さと危うさの実態を学ぶことができる。

この二部構成からなる上記の「ディグニティ・モデル」についてヒックスは次のように説明している。「このモデルは、私たちの生活や人間関係において尊厳が果たしている役割をより分かりやすくするために私が開発したアプローチである。特に、対立関係を理解する上で見落とされてきた重要な事柄を取り上げている。それは、人間が価値ある存在として扱われないことに対していかに傷つきやすいかだ。このモデルは、なぜ尊厳が侵害されると痛みを感じるのかを説明し、他者を無意識のうちに傷つけることがないための知識、認識およびスキルを紹介する。また、対立関係によって壊れてしまった関係の修復や和解の道を提言するものである。このモデルは、人間関係が崩壊したときに誰もが感じつつも言及することのできないことに、「尊厳侵害者」という名前を与えるものである<sup>(15)</sup>。」人間が簡単に誘惑に負けてしまう存在であることを理解することで、私たちはそうならないための策を講じることができる。尊厳教育はこのような意識の向上を目指すものである。

### 3.3 尊厳意識

学習のまとめは「尊厳意識」の学びである。ヒックスがその模範として注目するのはネルソン・マンデラ元南アフリカ共和国大統領である。南アフリカの人種差別政策の下で投獄されながら、自尊心に深く根差したリーダーシップを発揮できた人物である。マンデラが示したように、自分の尊厳の主体者は自分であり、誰も自分の尊厳を奪い取ることができないと知ると、人間は強く生きることができる。マンデラは、私たちが自らの自己防衛本能の奴隷ではないことを示している。尊厳を学習し、自らの尊厳を意識することで相手や自分を傷つける誘惑に負けずに強く立ち上がることができる。ヒックスの本には教育現場で尊厳教育カリキュラムを取り入れた学校の実例が紹介されているが、ある小学6年生の言葉が特に注目し値する。「私の意見では、尊厳とは高貴さに一番近いと思います。たとえ生まれた身分が高くなくても、尊厳は、私たちが倒れてしまいたいと思うときでも、私たちが雄々しく立たせてくれるものです<sup>(16)</sup>。」ワークショップを通してこのような実例を紹介することは参加者の尊厳意識を高める効果がある。尊厳意識のもたらす「強さ」に触れることで、学生たちは自らの命に対して前向きになり、エンパワーメントの実感を得、または尊厳学習の積極的意味を実感するようになる。この「気づき」こそが、尊厳教育の大きな目標である。

#### 4 尊厳学習の実例

ワークショップは計10回、延べ人数551名の参加があった。表2が示すように初回は町田キャンパスで人間の安全保障をテーマとした授業でワークショップを行い、参加者の中からさらにワークショップ主催者として関わりたいとの声があったのでその後学生有志によるワークショップも実施した。その他、新宿キャンパスでは董光哲先生の「リーダーシップ論」の授業、筆者の「宗教とグローバル社会」の授業、さらに町田キャンパスで長谷川(間瀬)恵美先生が担当する「探求サービスラーニング・宗教と社会貢献A」の授業でワークショップを行った。

表2 桜美林大学で行われた尊厳ワークショップ

日時	会場	参加人数	学生ヘルパー
2021年度秋学期 11月 (町田)	滝澤美佐子授業	23名	
2021年度秋学期 11月 (新宿)	董光哲授業	70名	
2022年度春学期 7月 (町田)	学生の有志企画	15名	3名
2022年度春学期 7月 (新宿)	Mensendiek 授業	243名	
2022年度秋学期 11月 (町田)	学生の有志企画	13名	6名
2022年度秋学期 11月 (新宿)	Mensendiek 授業	17名	
2022年度秋学期 11月 (新宿)	董光哲授業	50名	
2022年度秋学期 12月 (町田)	Mensendiek 授業	22名	
2023年度春学期 5月 (町田)	長谷川(間瀬)恵美授業	18名	
2023年度春学期 5月 (新宿)	Mensendiek 授業	80名	

#### 5 感想文から見えてくる学習効果

尊厳ワークショップに初めて参加する学生たちは、難しい話になるのではないかと身構えるが、意外にもこのテーマが自分の生活に直結する問題だと実感すると積極的に学びに参加するようになる。この実感はワークショップを通して得た「知識」だけではなく、他の学生と一緒に学びを深める「体験」から生まれるものである。尊厳の理解が「知る」ことから「分かる」ことへと深まる中で、そしてお互いから学び合う経験を通して、学生たちに新鮮な学びに対する興味と意欲が生まれる。授業後には、学生にコメントをA5の紙に書いて提出してもらおう。コメントを読むと、大半の学生が主体者としてさらに自分なりに尊厳について考えてみたいと述べていることが印象的である。

参加者の感想は自由記述形式にした。筆者は感想文に目を通し、その感想文から浮かび

上がった主要テーマを次の10項目に分類した。①新しい発見、②自分事として考える、③楽になった、④私の体験談、⑤～してみたい、⑥教育の必要性、⑦他の学習分野との関連、⑧共に学ぶ意義、⑨世界共通、⑩問いが残る。提出されたコメントの結果をもとに、以下、尊厳教育の三つの効果を見てゆきたい。これらの学習効果は資料2に見る学生たちのコメントがもととなっている。(本レポートの最後にある資料2を参照)尚、今回の研究は自由形式のコメントによるものであることから客観的効果を示すにはいたっていないが、今後筆者が取り組む研究にとって学生のコメントが大きな可能性を示す内容であることを述べておきたい。

### 5.1 パーソナルなストーリーを普遍的な枠組みで捉え直すことができる

尊厳と聞くとどこか遠くにある深刻な問題(戦争、貧困、搾取など)と考えがちだが、学生たちは「身近なものだと分かった」、「新しい扉が開いた感覚」だと感想を述べている。「ディグニティ・モデル」を学ぶことで参加者は意識して自分事として尊厳を考えるようになるだけではなく、自分のパーソナルな経験をより広い普遍的な枠組みの中で捉え直すことができる。傷ついた時の経験、人に知られたくない恥ずかしい弱さ体験、小さなことかも知れないけれどずっと気になっていた嫌な経験が、自分の尊厳に関わるほど大事なものだとは知ると学生たちは新たな気持ちで自分を振り返るチャンスを得る。「今までの自分の行動を見直すきっかけになった」などの感想が示すように、広い視野で自分を見つめ直す効果を生む。実に多くの学生が感想文に個人的な体験談を記しているが、その体験を尊厳という普遍的なものに関連づけて捉えることで今までもやもやしていた気持ちが整理されたと書く学生たちがいる。また、グループ内で経験を分かち合うことで、学生たちはお互いのストーリーに共感する経験を得る。今まで誰にも話さなかったパーソナルな経験が実は人に共感してもらえるのだと知り、「パーソナルな部分を話したことで、共感してもらい、心が晴れた気がした」と自らを振り返る学生もいた。ヒックスによると人間は意味のあるつながりを求める習性を持つ<sup>(17)</sup>。人間誰しも、つながりを得ると安心感を覚え、つながりが絶たれると不安になる。傷ついたパーソナルな経験は、他者の共感を呼ぶ経験でもあり、つながりを実感できる経験となる。このように、人間理解の軸としてお互いの尊厳を意識するようになれば、お互いの価値と弱さに対してより思いやりを持って接することができるようになるのではないかと筆者は考える。

### 5.2 尊厳を守る具体的な方法を知る

学生の感想の分類項目で特に注目したいのは「～してみたい」という分類である。尊厳学習が学生たちのエンパワーメントにつながっていることを表している。強いモチベーションを示した学生の感想から、二つのことが読み取れる。まず第一に、「自分を大事にするために自分の尊厳と向き合っていきたい」「尊厳を大切にできるリーダーになりたい」

の言葉が示すように、「ディグニティ・モデル」は尊厳を守る具体的な方法を示している。今後の人生でお互いを大切にする時に使えるツールである。尊厳のレンズを用いて普段の生活を見た時に、落とし穴に陥っていないか、または自分で自分の尊厳を傷つけていないか、一つの指標を手にした自信を表していると言える。第二に、「この考えを取り入れてゆきたい」「尊厳を誰かに託すのではなく私自身が作り上げて良いものを皆と共有する人間でありたい」「尊厳が守られる社会を作りたい」などの言葉は尊厳意識の芽生えを表している。ヒックスがマンデラを模範としたように、学生たちも自らのうちに尊厳意識を深めることで、エンパワーされた思いで感想文を書いていることが伝わってくる。ヒックスは自らのうちにある尊厳を意識することは「力の源」(fountain of power) となると言っている。「わたしの過去10年間の研究でわかったショッキングな事実の一つは、多くの人が自分の尊厳に気づいていない、あるいは自分が尊厳ある存在だと受け入れていないということです。むしろ過度に意識されているのが、自分の不十分さや自己不信、人の期待に応えられているか、愛されるにふさわしい存在なのかという不安定な気持ちです。自らのうちに「力の源」を感じるどころか、多くの人は自信の喪失を感じ、自分の人生に変化をもたらす力を失っています<sup>(18)</sup>。」尊厳教育はすなわちエンパワーメント教育である。

### 5.3 尊厳を他の人にも知ってもらいたい

学生たちの感想からさらに読み取れるのは社会に対する夢であり願いである。ある中国の留学生の言葉は注目に値する。「尊厳された環境が欲しいです。尊厳された交流環境を作りたいです。」このような言葉を見ると、社会の一員として学生たちの中に生き生きとしたビジョンが芽生えていることが分かる。このツールを学んだことで、自らが主体者として尊厳を守る歩みをしたと書いている。他にも、「学校の先生にも尊厳を知ってもらいたい」との感想が複数寄せられた。過去の学校生活で教師に尊厳を傷つけられた経験を持つ学生は多くいるようだ。また、「高校の集団生活で思い当たることがある」との言葉は、教育現場で尊厳が全く理解されていない現実を物語っている。筆者は、同様のワークショップを桜美林高校などの教員研修で行ったこともあるが、教員からも次のようなコメントが複数寄せられた。「教員として生徒と向き合う立場ですが、それ以前に「人として」今回の内容を再確認しなければならないと感じた。」ヒックスは、尊厳こそ今までの教育に抜け落ちていた根源的で大事なものであると指摘する。生まれ持っているからと言って、人は尊厳を大切にできる生き方ができるとは限らない。スポーツ、楽器、言語などの習得と同じように、尊厳は学ばなければならない。個々人が尊厳の学びを重ね、やがて組織や社会全体がその理解を育んで行く必要がある<sup>(19)</sup>。上記のような学生たちの言葉は、尊厳教育がそれほど根源的で重要な取り組みであることを物語っている。

以上、3つの視点から尊厳ワークショップ参加者の感想を見てきた。その学びは個人にとって実体験に基づく大変有意義なものであると共に、対人関係において有益であることを示している。今まで見てきた実体験に基づく尊厳の学びを桜美林学園の創立者・清水

安三の教育実践と結びつける試みは、今後、本校で学ぶ若い人たちに大きな意味を持つのではないかと期待する。

## 6 自校教育との接点

桜美林大学では全ての一年生に大学の建学の精神とキリスト教の基礎知識を学ぶ科目を提供している。その授業はまず、創立者清水安三（1891-1988）の生涯と彼を支えた人たちを紹介するところから始まる。多くの受講生はこの授業を受けることに戸惑いを感じる。しかし、激動の時代に中国へ渡り（1917年）、スラムの少女たちのために学校を始め、様々な困難を乗り越え、中国や朝鮮半島の人たちと共に生きた清水の物語に触れるにつれ大半の学生は自らの考えを改め、人間味溢れる創立者の物語から何らかの意味を読み取ろうとする。清水安三の物語には人の心を打つ真っすぐなものがあると筆者は考える。履修者の感想からも、創立者の歴史を知ることによって「桜美林の学生として誇りに思う」という声が毎年寄せられる。創立者の物語が時代を超えて学生たちの心を動かすのはなぜか？それは、そこに時間と空間の隔たりを超えて普遍的なテーマがあるからではないか。そのテーマこそ「人間の尊厳」であると筆者は考える。

すでに清水安三については数多くの先行研究が存在する。出版物としては清水の中国における足跡を記録した太田哲男の『清水安三と中国』（2011）や中国の陳経倫中学などを訪問して清水にゆかりのある人たちにインタビューを重ねた山崎朋子の『朝陽門外の虹』（2006）などが代表的である。また、桜美林学園内では学園史に関心のある人たちが集まって1997年に発足した「清水安三・郁子研究」が清水安三記念プロジェクトの年報をはじめ数々の冊子や本の発表をしてきた。2000年に清水安三記念プロジェクトが開催したワークショップの記録はその翌年に『清水安三の思想と教育実践～戦前・戦中を中心に（ワークショップ報告集）』にまとめられている。論文、活動報告、卒業生の証言に加えてワークショップ参加者の質疑と討論が記録されているが、その司会を務めた樽松かほるはその日の学びを次のように総括している。「なにか崇貞学園というのはもう50年以上も前になくなってしまった学校ではなくて、今、なんか日本の学校教育が行き詰っている問題に対して非常に大きなヒントを与えているといえますか、この個性尊重の教育とか、国際主義というもの、国際的な協調精神というのをどう教育実践のなかでやっていくのかとか、（中略）そういう本当に大きな様々な問題のヒントを得られたような気がして、昔の学校ではないような、なんか21世紀以降の学校について語るような会であったような気がしてなりません<sup>(20)</sup>。」樽松がいうように清水の教育実践の特徴を「個性尊重」や「国際的な協調主義」と捉えるならば、現代において私たちがこの教育実践を具体的な形で学びながら継承する方法はまさに尊厳教育にあるのではないかと筆者は考える。清水安三の思想と教育実践を、意味のある形で現代の若い人たちに伝えて行く方法として尊厳教育は有用である。今後ともその接点と可能性を筆者は探って行きたい。

## 7 まとめ

桜美林学園は、キリスト教を基盤として、清水安三の教育実践のビジョンを引き継ぐ使命を負う。学園が取り組む建学の精神を学ぶ学習は、聖書に基づくキリスト教の歴史や価値観を学生たちに教え、自らの命の価値を「石ころ」という表現で捉えてその人生を切り開いた創立者清水安三の物語を紹介するものだ。この学習に尊厳教育を加えることによってより効果的な、そして個々人に意味のある教育実践ができるのではないかと筆者は考える。尊厳の学びは個々人に自らの命をより広い普遍的な枠組みで見える機会を提供し、人との関係性を生きる上でエンパワーメントにつながるツールを与える。近年、自己肯定感に苦しむ若者、または対人関係に悩む若者の姿が顕著にみられるが、学生たちが尊厳を自分事として考え尊厳意識を育む学習環境を得ることで、本学が大切にしている価値観（命の価値、隣人愛、学而事人、個性の尊重、国際的な協調主義、多様な価値観の尊重など）への理解が深まることや、オペリンナーとしての力強さがより発揮されることと期待する。本研究ノートは、これまで学内で実施された尊厳教育の実践を紹介するものであり、次年度から筆者が共同研究として加わる学内学術研究（桜美林大学から発信する「新しい尊厳教育」の試み）につながるものである。

## 注

- (1) Hicks D. (2019)、70項。
- (2) 国連の世界人権宣言には、「人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利とを承認することは、世界における自由、正義及び平和の基礎である」とあり、ドイツ連邦共和国基本法第1条には「人間の尊厳の不可侵」とあり、国連の持続可能な開発目標(SDGs)の五つの決意には「すべての人が尊厳や平等が守られ」とある。
- (3) 左近豊 (2019) 「『人間の尊厳』再考 旧約学的視座からの1つの試み」『日本の神学』58号、日本キリスト教学会編、180-185項。
- (4) 『尊厳 その歴史と意味』(2021)、7項。
- (5) Hicks, D. (2011) この著書でヒックスは海外で関わった様々な状況を紹介しながら尊厳に対する無理解が和解への道をふさいでいる状況に触れ、対立関係を解きほぐす糸口として尊厳理解が力になったことを説明している。
- (6) Hicks D. (2019)、p.68.
- (7) *The Humanistic Management Journal*、<https://www.springer.com/journal/41463>
- (8) Hicks D. (2018) *Leading with Dignity: How to Create a Culture that Brings the Best out of People*.
- (9) Hicks D. (2011) *Dignity: The Essential Role it Plays in Resolving Conflict*、p.4
- (10) *ibid.*、p.1.
- (11) ヒックスが赤ん坊を例にとって人間の価値と弱さを論じるのはHicks, D. (2018)、2項。尊厳

が生まれてくるだけで持っているものであることを最もストレートに感じさせる例である。

- (12) 脳神経科学者M・リーバーマンは痛みを認識する脳神経に注目し、身体的痛みと精神的痛みが同じ神経経路を伝って脳に到達することを実証した。人間の脳は身体的痛みと精神的痛み(ソーシャルペイン)の違いが分からない。いじめ、差別、ヘイトなどは人間の脳に「痛み」として認識される。Hicks. D (2018)、p.22.
- (13) 「尊厳ストーリー」とは個々人が持つ尊厳に関わる原体験のことを言う。今までの生活を振り返って尊厳が尊重された経験や侵害された経験である。個々人の過去に眠っている物語を意識することで、尊厳を守るときの自分の強さと弱さが自覚できるようになる。Hicks. D(2018)、p.146.
- (14) ヒックスは、人間の理性と行動の間に生じる矛盾を他分野の研究成果を用いて説明する。進化生物学では人間の自己防衛本能の研究、心理学ではウィリアム・ジェームスが提唱する“the Me”と“the I”の考え方である。人間の複雑な心理と習性はお互いの尊厳を傷つけてしまう原因となっている。
- (15) Hicks. D (2011)、*Dignity: The Essential Role it Plays in Resolving Conflict*. p.2.
- (16) Hicks. D (2018)、*Leading with Dignity: How to Create a Culture that Brings the Best out of People*. p.66.
- (17) Hicks. D. (2018) *ibid* p.100.
- (18) 『尊厳のリーダーシップ』84項。
- (19) 『尊厳のリーダーシップ』173項。
- (20) 『清水安三の思想と教育実践－戦前・戦中を中心として』178項。

## 引用文献

- Hicks, D. (2011). *Dignity: Its Essential Role in Solving Conflict*. New Haven and London: Yale University Press.
- Hicks, D. (2018). *Leading with Dignity: How to Create a Culture that Brings the Best out of People*. New Haven and London: Yale University Press.
- Hicks, D. (2019). Reflections on Love and Dignity in Resolving Conflict. *Journal of Interreligious Studies*. Issue 27 pp.67-72.
- ローゼン・マイケル (2021) 『尊厳 その歴史と意味』岩波新書
- 左近豊 (2019) 「人間の尊厳」再考 旧約学的視座からの1つの試み 『日本の神学』58号、日本キリスト教会編、180-185項。
- 清水安三記念プロジェクト編 (2001) 『清水安三の思想と教育実践～戦前・戦中を中心』桜美林大学
- ヒックス・ドナ (2021) 『尊厳のリーダーシップ：人や組織の内なる力を引き出すディグニティ・モデル』昌文社

## 付記

本研究レポートは2023年3月22日に開催された日本キリスト教学会関東支部会で発表されたものである。

## ディグニティ・モデル

## 資料1

## 【尊厳の10の要素】

**その人らしさの受容 (アイデンティティの受容)：**人と接するときに相手を自分よりも上、または下に見ない。その人が他者から受けるマイナスな評価を恐れずに自分を素直に表現する自由を与える。偏見やバイアスを持たずに接し、相手のアイデンティティの大切な一部として人種、宗教、ジェンダー、階級、性的指向、年齢、障害を認めて受け入れる。

**評価する：**人の能力、努力、配慮、支援などを評価する。褒め惜しみせず、人の貢献やアイデアに対して感謝と評価を惜しまない。

**認識する：**本気で相手に関心を向け、耳を傾け、理解しようと努め、正当と認め、またその人の経験してきたことや関心事に注目する。

**インクルージョン：**あらゆるレベルの関係性（家族、コミュニティ、組織、国）において、人がその交わりの一員であると感じてくれるようにする。

**安全：**二つのレベルで人に安心を与える。身体的レベルにおいて体の安全を感じることができるよう、そして、精神的レベルにおいて辱めを受ける心配から解放されるようにする。報復を恐れずに自己表現ができる場を作る。

**公平性：**人を公平に扱い、公に認められたルールや法律に従って平等に扱う。

**自主性：**相手が自らのために行動し決断することで、未来に可能性と希望を感じるよう励ます。

**理解する：**相手の考えが大事であると信じて受け止める。相手に自らの考え方を述べることや自分の視点を説明する機会を与える。理解するために積極的に耳を傾ける。

**良い方に解釈する：**信頼性のあるものとして相手に接する。相手の善良な動機と誠実さを前提に接する。

**言動に責任を持つ：**自らの行動に対して責任を取る。相手の尊厳を侵害した場合は謝る。害を与える行動を改める姿勢を示す。

## 【尊厳を侵害する10の誘惑】

**挑発に乗る：**相手の悪い態度や行動に挑発されて、自分自身の行動が影響されないようにする。尊厳を保つには自制が一番。相手に傷つけられたからと言って相手を傷つけることを正当化しない。

**面子を保つ：**嘘をついたり、隠したり、自分を欺いたりしない。自分がしたことについて真実を述べる。

**責任から逃げる：**相手の尊厳を侵害したときには、過ちを犯したことを認め、相手を傷つけたことに対して謝る。

**偽りの尊厳を求める：**自尊心のために対外的な評価や称賛を求める欲求に注意する。もし自分の価値が周りの人の評価にのみ由来すると考えるならば、それは偽りの尊厳を求めていることになる。自分の尊厳は自らの内からも来る。

**偽りの安全を求める：**人とのつながりが欲しいために自分の尊厳を貶めてはならない。もし、尊厳が継続的に侵されているような関係にとどまるならば、自らの尊厳を保つことよりも人との関係性を優先していることになる。

**対立を避ける：**誰かに自分の尊厳を侵害されて黙ってはいけな。自分のために立ち上がりなさい。対立を避けてはならない。侵害状態があるということは、その関係において何かが変わらなければならないことを意味している。

**自分が罪のない被害者だと思ひ込む：**困難な関係において自分が罪のない被害者であると思ひ込んではいけな。自分にも責任があるという可能性を排除しない。あなたはそのことに意識が及んでないかも知れない。私たちは相手の目線で見ることができるように、より広い視野から自らを見る必要がある。

**フィードバックを拒否する：**他者からのフィードバックを嫌がらない。当然だが、私たちが分かっていないということに気づかない。誰にも盲点があり、無意識のうちに不適切な行動を取ることがある。建設的な批判を拒否する自己防衛本能を乗り越えて、フィードバックを成長の機会だと考えられるようにならなければならない。

**罪悪感を避けるために他者を非難し侮辱する：**自分の犯した過ちから注目をそらすために他者を批判し侮辱してはならない。自分を守るために他の人を貶める衝動を抑えよう。

**偽りの親密さを求め、うわさ話をする：**人のうわさ話をする事で相手との親密な関係を求める傾向に気を付けよう。誰かその人のいないところで批判したり厳しく裁いたりすることは、話し相手と親密な関係を作るためであったり、話題としては面白いかもしれないが、それは有害であり品のないことである。人と親密な関係を築きたいのであれば自分についての真実、つまり自分の内面で本当に起こっていることを語りなさい。そして相手にも同じことを求めなさい。

資料2

I パーソナルなストーリーを普遍的な枠組みで捉え直すことができる

テーマ	学生の感想
新しい発見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身近なものだと分かった</li> <li>・ハードルが高いと思っていた</li> <li>・新しい扉が開いた感覚</li> <li>・尊厳を自分のこととして考えたことがなかった</li> <li>・自分の視野を広げることができた</li> <li>・尊厳について深く考えることで、他者を思いやり尊重する大切さを知った</li> <li>・みんなの体験談を聞いて、尊厳の尊重や侵害はすぐく身近に存在すると知り驚いた</li> </ul>
自分ごととして	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今までの自分の行動を見直すきっかけになった</li> <li>・ハーフなので理解しやすかった</li> <li>・冷静に自分の感情が分析できる(感情の波に疲れてしまった時のツール)</li> <li>・具体的にポジティブに考えることができた</li> <li>・自分の気持ちが整理しやすくなると思う</li> <li>・「人ってこんなに簡単に傷つくんだ」と思っていたところだったので尊厳について話し合えてよかった</li> </ul>
楽になった	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽になった。弱さを隠すことで自分を信じていたが…</li> <li>・周りにも同じことを思っている人がいる。ほっとした</li> <li>・パーソナルな部分の話したことで、共感してもらい、心が晴れた気がした</li> </ul>
私の体験談	<ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生の自分は日本で尊厳を侵害された経験がある。パン屋で買い物をしていて、店員さんは笑顔で優しく接していたけど、私が友人と中国語で会話すると態度が180度変わり、笑顔がなくなり、冷たくイラつく顔になった。私はすぐく傷ついた。</li> </ul>

II 尊厳を守る具体的な方法を知る

テーマ	学生の感想
～してみたい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分なりに考えてみたい</li> <li>・この考えを取り入れてゆきたい</li> <li>・誘惑に逆行したい</li> <li>・尊厳を大切にできるリーダーになりたい</li> <li>・尊厳が守られる社会を作りたい</li> <li>・尊厳を誰かに託すのではなく私自身が作り上げて良いものを皆と共有することができる人間でありたい</li> <li>・アルバイト先で子どもたちが自己否定をしていて悲しく思う。それはテスト後のこと。今日もアルバイトがあるので10の要素を意識して接したい</li> <li>・自分を大事にするために自分の尊厳と向き合っていくたい</li> </ul>

III 尊厳のことを他者と共有する

テーマ	学生の感想
教育の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の先生にも尊厳を知ってもらいたい</li> <li>・高校の集団生活で思い当たることがある</li> <li>・尊厳された環境が欲しいです。尊厳された交流環境を作りたいです</li> </ul>
共に学ぶ意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークで他の学生と交流できた、</li> <li>・他の人の意見を聞いてそれは侵害かと思ってしまった</li> <li>・グループワークを通して他者の考え方が分かって面白かった</li> <li>・侵害経験を話すのは辛かった</li> <li>・自分の価値観が広がりました</li> <li>・共感することができた</li> <li>・他の人の尊厳が理解できた</li> </ul>
世界共通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなもこういった経験をしていることが分かった</li> <li>・尊厳は世界共通</li> <li>・同じ国に住んでいながら話し方や顔が少し違うだけで別扱いされるのはよくない</li> </ul>

IV その他

テーマ	学生の感想
他分野との関連	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SDG'sの「誰ひとり取り残さない」と関連する</li> <li>・S L理論(状況反応型リーダーシップ)と通じる考え方</li> </ul>
問いが残る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私は心が狭い人間です。何もしない自分に価値はあるのかと思ってしまう。人権とどこが違うのか?</li> <li>・私の生活はうわさ話が日常化している</li> <li>・対立が怖くて本心が言えないことがたくさんあった</li> <li>・傷つけてしまう理由が理解できた。責任を一生背負う必要はない</li> <li>・弱さを受け入れることは強さ?</li> <li>・どこまで対立を避けるべきか分からない</li> <li>・尊厳が侵害された例はイメージしやすかったが尊重された例はイメージしにくかった</li> <li>・尊厳を傷つけられた人間はどうやってそれを修復したら良いのか?</li> </ul>